

## 大宰府都城の復元

井上信正

### 1、はじめに

- ・都城とは、中国都城の影響を受けた都市設計をもつ都市で、東アジア各国で首都および副都・陪都で採用。碁盤目の街区をもつ条坊都市と、その外郭を備える。
- ・鏡山猛（1968）は、観世音寺や宇佐八幡宮（大分）の古記録から大宰府条坊の存在を推定、古代水田区画の「条里」と同じ方格地割単位をもつ条坊を備え、水城・山城・自然地形で囲われた「大宰府都城」を提唱。その成立を、天智朝（7世紀第3四半期）とした。
- ・阿部義平（1991）は、鏡山案以来の「条里」区画を単位とする条坊と、その南に広がる条里を「南郭」とし、水城・山城がこれを取り囲む「大宰府羅城説」を提唱。自然地形が途切れる部分には土塁等があったと推測した。
- ・都城というには条坊の証明が必要だった。考古資料に基づく復元研究が活発化したが、「条里」を単位とする条坊案も、その他の案も実証されなかった。その中で筆者提示の復元案（90mプランに基づく条坊案）のみ実証された。
- ・筆者はさらに大宰府都城について考察を進めた。それは中国都城の要素を備えつつ精密な都市設計がなされており、その成立・推移を、遺跡、文献史料、また都城比較から読み解いてきた。それは既説・定説と異なる内容も含む。

**私の立ち位置** ※時間の都合上、あまり説明できないと思われる内容を加筆しています。

#### 1、「政庁I期」について

- ①都城に関する7世紀第3四半期の遺跡（遺構・遺物）は、水城・大野城・基肆城以外にあるのか？  
→考古学的には、遺跡は天武・持統朝（7世紀第4四半期）が上限。第3四半期の出土品がない。
- ②政庁跡の最古期の遺構（政庁I期古段階）は、鏡山が推定した天智朝（7世紀第3四半期）か？  
→報告書を見る限り、政庁地区の「I期古段階」の遺構も、「I期新段階」と同じ7世紀第4四半期の範疇で説明可能。
- ③政庁跡で調査された政庁I期の遺構（掘立柱建物群）は、「古段階」「新段階」とも「大宰府政庁」か？  
→官衙とは思いますが、現時点の遺構情報から政庁施設（いわゆるコ字型建物配置等）とは認められない。

#### 2、「大宰府羅城説」の否定

「羅城」とは、条坊南端（朱雀大路南端）の正門を羅城門というように、都市を囲う城壁のことである。

筆者は、水城・大野城・基肆城そして前畑土塁を、大宰府都城を囲う「外郭」と呼ぶが、水城・前畑土塁の本質は遮断城（ないし長城）であり、「羅城」ではないと考える。阿部義平（1991）の「大宰府羅城説」は、鏡山案の「条坊＝条里説」を基礎とし、かつ条坊の南側に広がる条里を「南郭」と呼び、正方位条里全体を都市と見なした前提によって導かれた学説である。このため、条里が都市ではないと判明した時点で、これら「外郭」の性格を「羅城」とみた「大宰府羅城説」は成立しない。都市を囲う城壁としてこれらを設けたのではなく、外敵からの侵入を防ぐための遮断城が、条坊成立以降の大宰府都城において、利用されたのである。

そのあり方は、中国の長安四関、洛陽八関、国内であれば平安京東の山城・近江境に設けられた逢坂関のように、都城を囲う自然地形を利用し設けられた遮断施設、すなわち「関」を彷彿させるものである。実際、水城は「関」と呼ばれている（寛弘2年（1005）。大式高遠集）。水城に門が設けられたことは、遺跡で証明されているが、羅城の出入口に使われる「門」とは呼ばれておらず、「関」と認識されているのである。

また、死者が眠る葬地は、世界的に城壁外（羅城外）に設けられた。しかし水城築造以降も葬地（古墳追葬を含む）は「外郭」の内外で変化はみられず、内部の葬地排除はなされていない。水城は、百済の都・扶余の東羅城（城壁）に系譜をもつ城壁構造物だが、葬地を城壁外に設けた扶余都城の羅城とは、性格が明らかに異なるのだ。よって大宰府の「外郭」を羅城と呼ぶことはできない。羅城でなければ、大宰府都城構想を「天智朝の百済系都城導入」とみなすこともできない。天智朝に山城を中心とした百済系要塞が築かれ（中枢は大野城と推定）、天武朝以降、これらを外郭とする大宰府都城に更新されたとみる（契機は683年の複都制の詔）。

## 2、大宰府の都市構造

**政庁跡の遺構画期** ※大宰府の画期として利用されることもあるが、遺跡の画期であって「政庁」の画期ではない。

**I 期** (7世紀後半～8世紀初頭)・・・**掘立柱建物**で構成

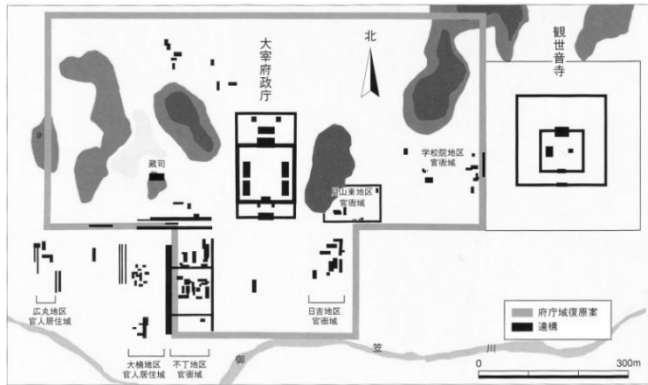
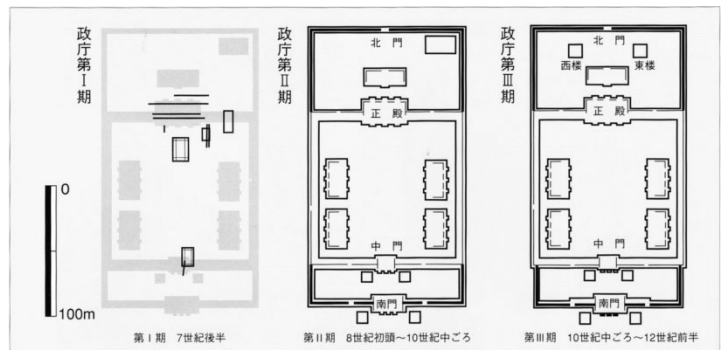
・II期の政庁正殿の直下で検出された東西列柱穴群を建物とみて、I期正殿跡と想定されている。しかし、少なくとも付随する建物の配置構成からは**政庁**とは認めがたい。

⇒I期の政庁跡地区は、官衙(役所)の一部だったと考える。

※近年、遺構の再解釈から7世紀末の饗饗施設との関係を指摘する小田裕樹の説もある。

**II期** (8世紀初頭(大宰府政庁の造営(718年頃))～10世紀中頃(941年))・・・**礎石建物**で構成

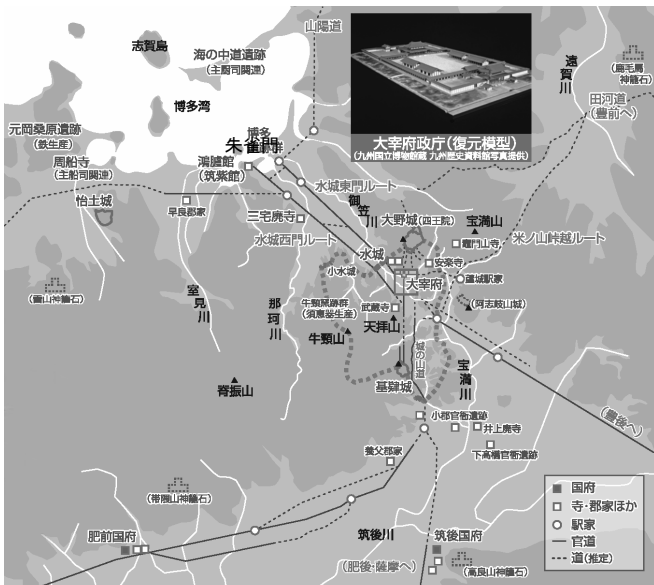
**III期** (10世紀後半～11世紀末。藤原純友の乱で焼亡するも、大宰府政庁が再建された。**礎石建物**で構成。



**8世紀の大宰府** 大宰府政庁跡のII期は、大宰府政庁の造営ではじまる。718年頃完成したとみられる政庁は、礎石建物で構成され、正殿・東西各2棟の脇殿・中門を単廊の回廊で囲い、正殿の背面は築地で囲み後殿などの建物を配す。また中門の南に南門が設けられ、その間も築地で囲っている。

中門の外側両脇には3×3間の掘立柱建物が建つ。また礎石配置を記した江戸時代の絵図に、南門の両脇にも同様の建物の存在をうかがわせる小区画が描かれている。これらは衛門舎と想定されているが、中国では古来より門の両脇に「闕」という呼ばれる門楼が置かれる場合がある。外国使を迎えた大宰府であればその可能性を考える余地があるが、実態は不明。

南門前は大きな段差があり、ここから御笠川まで広い空閑地となる。この南端に巨大礎石を用いた朱雀門があり、この間は政庁と結ぶ特別な空間だった。この中央西脇に、大型の四面庇南北建物があり、政庁に出勤する官人の朝集殿との説があるが、この広すぎる空間にこの建物一棟だけあること、早期に廃絶することから、朝集殿では違和感がある。実は、多賀城にも政庁・官衙域と外郭東門との空間に同様の建物例がある。筆者は、唐長安城の皇城内鴻臚客館の位置を参考に、両例とも来訪者のための殿舎と推測。早期に廃されたのは、客館として朱雀大路沿いに移ったためと考える。この空間の東西および政庁周辺は大宰府の実務を行った官衙跡が広がる。朱雀門以北は官衙街(皇城)とみてよいだろう。



朱雀門前には、平城京朱雀大路の約1/2の路面幅(約36m、120小尺)をもつ南北大路(以下、朱雀大路)が設けられ、南端には羅城門があったと推測する(観世音寺所蔵の兜跋毘沙門天像(重文)は、平安京同様、羅城門に置かれたという説を支持)。朱雀大路の東西に、古代都市大宰府条坊が広がる。

全国の国府跡の調査では、国庁外の大路沿いで赴任官の「館」(国司館等)が見つまっているため、令和元号の典拠となった「梅花の宴」を催した大宰帥・大伴旅人の館「帥館」も条坊内の大路沿いだったと推測する。加えて旅人の歌から推測されている丘が立地する場所となると、菅原道真謫居地(府の南館。現在の榎社)の朱雀大路を挟んだ東向かいしかないだろう。

さて、条坊の外側は正方位を向いた条里地割が平地を埋めるよう広がっている。周辺丘陵には葬地も設けられている。さらに外側には水城・大野城・基肆城があり、南東部で近年見つかった前畑遺跡の土塁までが、大宰府都城の範囲とみている。この外側には、地形に合わせた形で斜方位条里が広がっているが、内側は地形を無視して施工された正方位条里である。異質な地割だが、大宰府都城の範囲を考える上で参考となる。

なお、条坊北側は四王寺山に接しており、主要施設と大野城城門は直接尾根筋の道でつながっている。ここに条里はなく葬地の確認例もない。都城では宮殿の北の「後苑」が背後を守る意味もあるが、政庁の北側も同様の空間や意味合いを考えるべきだろう。ここは登城路を介して大野城と接しており、現時点では条里・葬地は確認できない。なお天満宮付近の条里や筑前国分寺付近の条里を介した大野城登城路もあり、付近では葬地も営まれている。

大宰府都城の南を守る基肆城へは、朱雀大路から南に広がる条里を介し、尾根筋を利用した登城路で東北門・北帝門に至る。「城の山道」(万葉集)は、基肆城の中心を南北に抜ける東北門道の可能性は残しておきたい。

水城は、官道を介して条坊とつながる。官道は2道あり、水城西門ルートは、官道を経由して博多湾岸の筑紫館(鴻臚館)から海外へとつながる道(筑紫道)、水城東門ルートは、都と大宰府とを結ぶ大道(山陽道)である。なお御笠川には水門があったとみている。付近から8世紀の大宰府I式鬼瓦・瓦が出土し、川と土堤の間には埴敷遺構があったとの古老の聞き取りも報告されている。客館跡南の鷺田川岸に8世紀の畿内産土師器など希少品出土例がみられることや、地名や、舟が通う様子を詠んだ和歌(平安・鎌倉時代)などから、水城を通る御笠川舟運が推定される。

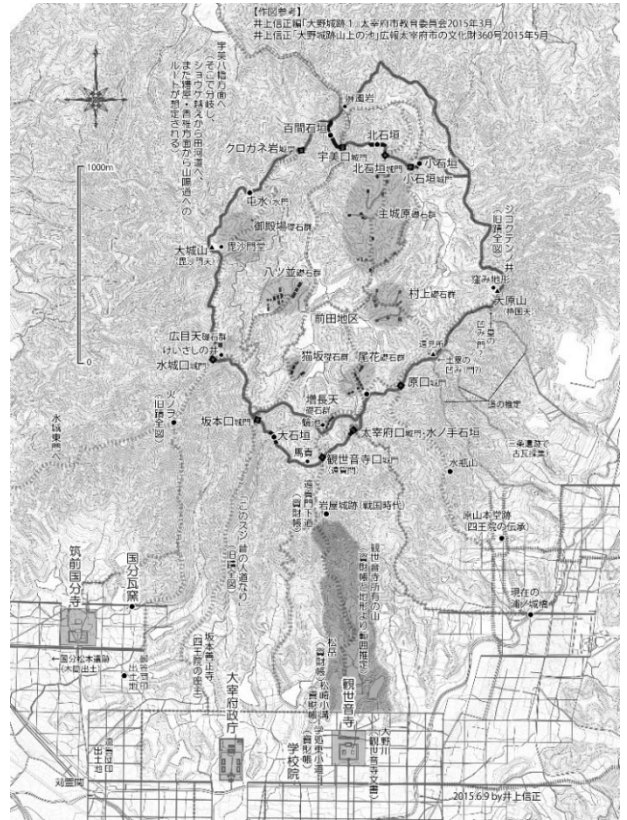
**条坊プラン** 都は、支配者(皇帝・王・天皇)、貴族、官人らが住まう場所である。東アジアでは方位に基づき碁盤目の街区を作り(条坊)、臣下は本拠地から離れて集住させられ、支配構造が視覚化された。これを条坊制という。

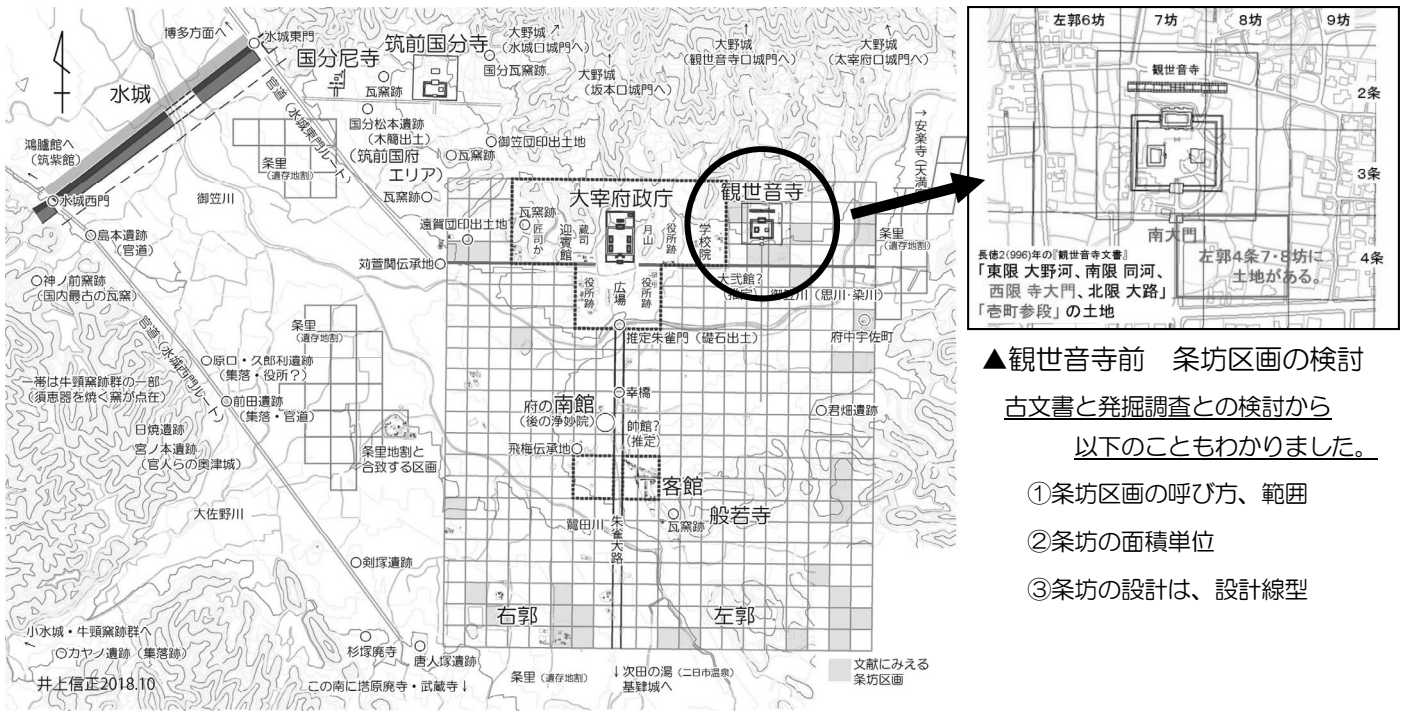
大宰府は都ではなかったが、「条」「坊」また「左右両郭」「左郭司」等の用語が平安時代中～後期の文献史料にみられる。遺跡では7世紀末以来、正方位を向いた区画溝・道路が見られ、一区画90m四方のプランの条坊が復元される。

文献史料(975～1148年間の記録が残る)では、条坊一区画を「坪」と呼び、最大数は、南北22条、左郭(東側)12坊、右郭(西側)8坊。これは、遺跡で確認した奈良～平安時代(政庁II・III期)の条坊プラン範囲と一致する。施工は、藤原京・平城京と同じく設計線を基準に道路幅を割く方法で、当初の単位尺はおそらく大尺。設計線による方形区画の面積を「1町」として、道路は概ね2反(段)が割かれ、残り8反(段)が宅地利用されたとみられる。

道路幅は両側溝芯々間距離約5～7m。設計線との誤差±1.8～4.5mで敷設。文献には「大路」「小路」の別がみられる。坪内は、溝や柵でさらに1/2、1/3、1/4に区割されたものも多い。区割の更新も頻繁だったとみられる。

また、条坊の範囲は固定ではなかった。次項で述べるように90mプラン上には7世紀末の溝もあり、西は右郭11坊まで確認したが8世紀初頭までに廃されている。また北辺4条は8世紀前半、東辺4坊は9世紀末～10世紀初めに追加されたことが窺える。なお筆者は藤原京との比較から7世紀末(政庁I期)の条坊範囲と当時の政庁の位置についても推定しているが、こうした検討から政庁I・II期の条坊は4坪で「一坊」だった可能性を指摘している。





▲観世音寺前 条坊区画の検討

古文書と発掘調査との検討から

以下のこともわかりました。

- ①条坊区画の呼び方、範囲
- ②条坊の面積単位
- ③条坊の設計は、設計線型

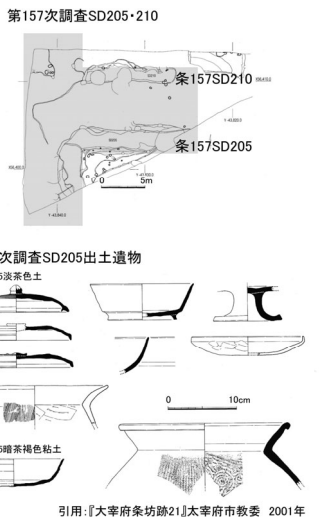
**条坊の成立** 条坊内では、整地は広い範囲で確認されており、何層にも及ぶところもある。このうち最も古い整地は7世紀末（第4四半期）から8世紀初め（第1四半期）頃のものである。また、奇跡的に浚渫をまぬがれて溝内に古い埋土を残した、7世紀末の条坊関連の溝も見つかっている。左郭16条2坊では、この坪の北辺を限る15条路（東西道路）の7世紀末の側溝と、坪の内部を南北1/2に分ける7世紀末の区画溝（東西溝）が見つかった。いずれもまとまった量の出土品が年代の確証を与えており、条坊施工が8世紀初頭完成の大宰府政庁（Ⅱ期政庁）に先行することを物語っている。

条坊が先行することを示す事実はほかにもある。大宰府政庁・朱雀大路・観世音寺といった奈良時代の主要施設は、条坊区画と明らかな配置上のズレがあることだ。これがもし多少の施工の時期差があったとしても一体的に計画されたものであれば、整合させたはずだがそうはなっていない。これは、条坊とⅡ期政庁とは、それぞれ成立背景が違っていることを示している。

つまり、8世紀初頭完成の大宰府政庁は、7世紀末に施工された条坊を利用しつつ、新しい理念・政策のもとに政庁・朱雀大路等を敷設したと考える。それぞれの成立背景は、当時、次々と作られた宮都の動向にヒントがある。

●条坊成立期の区画遺構・整地層

【左郭7条路・11坊路】



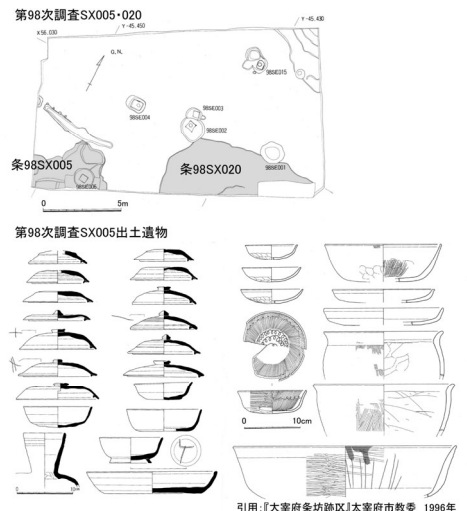
引用：『大宰府条坊跡21』大宰府市教委 2001年

【15条路（左郭2坊）】



引用：『大宰府条坊跡36』大宰府市教委 平成20年

【整地層（右郭12条8坊）】



引用：『大宰府条坊跡24』大宰府市教委 1996年

### 3、大宰府都城の成立

「新城」大宰府 持統天皇3年(689)9月に、筑紫に遣わされた使者に「新城」を監させたと『日本書紀』は記す。このころ造営され条坊を備えた藤原京も「新城」と呼ばれており、この新城は大宰府条坊を指すとみられる。

天武天皇は、中国志向の政策と中央集権化を進め、律令法典や戸籍の整備に取り組み、そして中国系都城「藤原京」を構想した。これが筑紫大宰府にも波及し、前代の百済都城系要塞から、新しい中国系都城への移行が促されたのだろう。

ここに一人のキーマンがいる。栗田真人という人物である。筑紫新城を監させる直前に筑紫大宰の異動があり、皇族の河内王が赴任するが、その前任が栗田真人であった。彼は、筑紫新城の造営に関わったとみてよいだろう。この「新城」造営経験は、こののち、彼の使命につながった。

「益城」大宰府 奈良時代の初め、条坊北辺に大宰府政庁を置く北闕型(平城京型)の古代都市が完成する。この時の大宰府造営には平城京造営関係者が関わっていた。

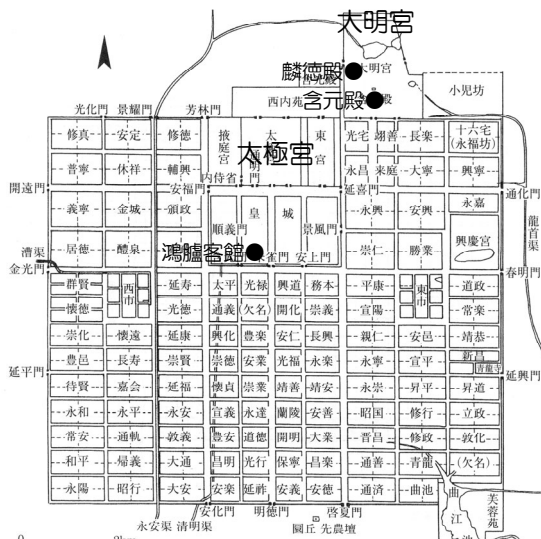
まずは栗田真人である。彼は藤原不比等のもと大宝律令の編纂にも関わるが、大宝元年(701)正月に遣唐執節使となり、同2年(702)6月に渡唐する(『続日本紀』)。なお当時の国号は周で、真人を迎えたのは皇帝・武則天(唐3代皇帝・高宗の皇后)。この遣唐使(遣周使)は白村江敗戦後の本格的な使節であり、国交回復に加え、律令整備、藤原京造営などを伝えたとみられるが、唐の制度や都城のあり方とは隔たりがあり、栗田真人らがもたらした情報をもとに、慶雲の改革が行われ、そして唐長安城を参考として「平城京」を造営、遷都したと評価されている。

平城遷都詔直後の和銅元年(708)3月、中納言となっていた栗田真人は再び大宰帥に任命される。この前から、平城京造営の「百姓身役」・大宰府再整備のための「筑紫之役」が始まっていたが(『類聚三代格』慶雲3年(706)2月16日格)、栗田真人の再赴任によって事業が本格化。翌年2月には観世音寺造営督促の詔が出され、6月には大宰府が所在する御笠郡の大領・宗形部堅牛が「益城連」姓を賜っている。この賜姓は持統朝の筑紫新城を「益城」するに際して、地元への協力要請を意味するものだろう。同時に、嶋郡(志摩郡)の少領(郡の次官)中臣部加比にも「中臣志斐連」姓が与えられた。嶋郡は現在の糸島市~福岡市西部で、九州大学伊都キャンパス建設に伴う元岡・桑原遺跡群一帯の遺跡調査で大規模な鉄生産が行われていたことが明らかとなった。大宰府再整備に伴う鉄の需要増加は想像されるところである。おそらくこの二人の賜姓は大宰府再整備に深く関わった措置と推測する。

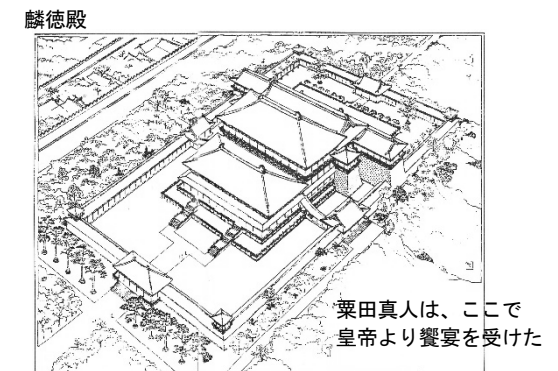
霊龜元年(715)5月、次の大宰帥には、平城遷都の詔の直後から「造平城京司長官」となった多治比池守が任命された。そして養老2年(718)6月西海道庸の全免が諸国並みに解消され「筑紫之役」が終了した。こうして宮殿に似た(朝堂院形式の)政庁を北に置く、平城京に似た都市が完成したのである。

#### ●栗田真人がみた、唐の長安城

○唐(618-907)の長安城

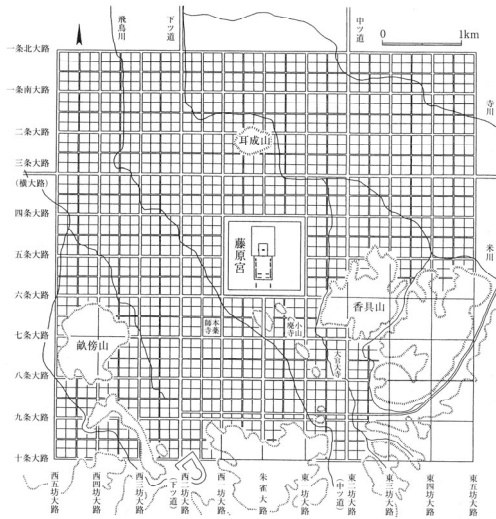


第22図 唐長安城の復元

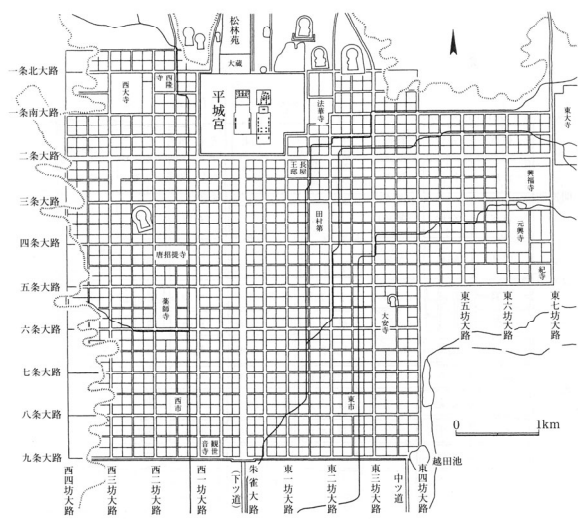


○藤原京 (694-710)

○平城京 (710-784)



第20図 藤原京の復元 (一部の条坊は模式図、条坊呼称は便宜的に平城京に準ずる)



第21図 平城京の復元

**中国系都城との共通点**

唐長安城の情報が平城京・大宰府造営に反映したことを示すように、これらの都市には似た要素がある。北闕型（北の中央に宮殿）というだけでなく、朱雀大路の幅や都市の辺長が概ね長安城4：平城京2：大宰府1であることも偶然ではあるまい。都市景観を飾る軒先瓦の意匠も、蓮華文の周りに珠文を配す点では三都市共通している。かつて唐の高宗・則天武后合葬陵の乾陵を訪れたとき、驚いたのは、皇帝陵を守る石獅子像が写実的で有名な大宰府の鬼瓦と同じ顔をしていたことだ。おそらく唐で流行っていた獅子の顔が鬼瓦のモチーフだろう。

中国系都城との共通点は、政庁から望む風景にも表れている。中国には都城南の山「南山」を都城範囲とする考えがあり（『史記』秦始皇本紀三九）、南の山の頂を闕（けつ。入口などの脇に設ける建築物）とみなし、中軸線の延長や子午道（南北道）が二つの頂がおりなす間をぬけていく。大宰府でも朱雀大路をさらに南進し基肄城を縦断する南北道があり、その道に設けられた基肄城東北門は、政庁から見ると山の谷間に位置する。大宰府に導入された子午道と闕である。



大宰府政庁正殿から見た基肄城

西暦	天皇	国内の事項	筑紫の事項	帥(長官)	政庁跡の画期	都城造営の理念・系譜
661	齊明		朝倉宮へ遷宮 齊明天皇急死			(百濟遺民の受入)
663	天智		白村江の敗戦			朝鮮系都城 (百濟扶余泗沘城に類似)
664			水城 造営			(新羅との外交)
665			大野城・基肄城 造営		集落・古墳 (観世音寺発願 所在か)	
672	天武	壬申の乱		粟隈王	有事 (大野城に 所在か)	
673		天武天皇即位				
676		「新城」記事初見(676~689、天武~持統期にみえる)		厩垣王		
682			筑紫大宰丹比嶋が大鐘を貢上す	丹比嶋	政庁I期古	平時 (大野城南麓の開発 (官衙・都市の整備)
683		複都制の詔	正月、丹治嶋が三足の雀を貢上	丹比嶋か	政庁I期新	
684		藤原京の宮室之地を定める				中国系都城 (藤原京に類似)
689	持統	飛鳥浄御原令 庚寅年籍	石上麻呂・石川養名を筑紫に派遣し位記を送り、筑紫の新城を監査する	粟田真人 河内王 (間8月~)		
690			大宰・国司、皆遷任する	河内王		
691			筑紫史益の29年にわたる忠勤を賞す	河内王		
694		藤原京遷都(12月)		三野王(9月~)	浄御原令制下の 筑紫大宰府 (皇親の赴任)	
695-696			国分松木遺跡出土の戸籍・針櫃木簡が作られる (筑紫大宰府、筑前国の存在が確実)	(三野王か)		
698	文武		大野・基肄・鞠智3城を繕治させる			
701		大宝律令				
703		第7回遣唐使	粟田真人、遣唐執節使として渡唐(702~704年)	石上麻呂(正三位・大納言)	大宝令制下の 大宰府 (重臣の赴任)	(遣唐使再開)
706		百姓身役・筑紫の役	筑紫の役(706-718)	大伴安麻呂(従三位・大納言)		中国(唐長安城)系都城 (平城京に類似)
708	元明	平城遷都の詔	粟田真人、帥に再任(3/13)	大伴安麻呂(3月~、 従三位・中納言)	政庁II期	
709			観世音寺造営督役の詔 御笠郡大領の益城連賜姓	粟田真人		
710		平城遷都		粟田真人		
713		度量衡の改正(度地尺は小尺で統一)		粟田真人		
715	元正		多治比池守、帥となる(5/22)	多治比池守(5月~)		
717			多治比池守、褒賞	多治比池守		
718			筑紫の役に伴う、庸全免が、諸国同様半免に (この頃、第II期政庁完成か)	多治比池守(~3月)		
721			大宰府城門に火災(類聚国史)			
723			僧満誓、観世音寺造営のため、筑紫派遣			
~730	聖武		大伴旅人在府(神亀4年頃(727)~天平2(10))	大伴旅人		
732		造客館をおく	このころ、大宰府条坊内に客館が設けられる	藤原武智麻呂		
735~739		天然痘大流行	735年に、大宰府管内で流行はじまる	藤原半合		
740		藤原広嗣の乱	大將軍・大野東人、肥前国松浦郡で広嗣を処刑			
741		国分寺建立の詔				
742			大宰府を廃止。743年には鎮西府を置く			
745			大宰府を復置。僧玄坊を派遣し、観世音寺造営にあたらせる			
746			観世音寺法要	橘諸兄(左大臣兼任)		

#### 4、都城制導入理由～国際標準の礼制に基づく都市

以上、7～8世紀の激動のなかで誕生した大宰府整備を概観した。百済の役の際に筑紫は斉明天皇の親征拠点となったため、天智朝では、有事対応の百済都城系の要塞が導入された。ところが天武・持統朝以降は、平時の大宰府の役割をもとに、宮都造営と並行して本格的な中国系都城整備が進められた、とまとめることができる。

当時の都城には、礼制機能がそなわっていた。つまり、都城は生活の場であるとともに儀礼の場でもあった。それは、北を上位として主従主客を示す方位や中軸線を重視するもので、ときにそのことを認知した上で、配列し挙動した。中国ではじまったこうした礼制は東アジアで通有するものとなり、内政・外交で機能し、都城・官衙はその舞台として整備された。このため7～8世紀の各国の宮都は、これに則った中国系都城（隋唐長安城）を国際標準モデルとしたとみられる。

これを日本ではまず平城京・大宰府が採用した。なお地方においては、内政面の役割は国府が担っており、これを踏まえると、大宰府に都城制が導入されたのは、内政的要因よりも外交舞台を備えるという意味合いの方が強いだろう。つまり、日本という国が大宰府という場所で「外交」を行うため、その「賓礼の舞台」として礼制機能を備えている「都城」を採用した、と考える。このことを強く印象づけたのが、朱雀大路沿いに置かれた客館跡の発見であった。

#### 5、見つかった「客館」

西鉄二日市駅北側一帯は、1万数千㎡にわたり太宰府市教育委員会が埋蔵文化財調査を行った。条坊一区画以上にわたる広範囲の調査はここが最初で最後とみられるが、政庁I期（7世紀末）から12世紀前後にわたる膨大な情報が得られ、大宰府条坊研究、大宰府成立史、そして客館跡と推定されたことで大宰府外交研究が、大いに前進した。

ここに展開する8世紀第2四半期から9世紀前半にかけての遺構が客館跡である。朱雀大路の東に隣接する左郭14・15条1・2坊の4坪を占有したとみられ（南北約170m、東西約150m）、西は朱雀大路、東は古代寺院・般若寺から延びる丘陵で区切られている。南の道路際には塀が設けられたことを示す痕跡があり、おそらく四周は遮蔽されていた。

敷地南半東側（左郭15条2坊）には大型の掘立柱南北棟2棟が南北に並んで見つかった。いずれも条坊内最大の建物で、南北に長い建物である。北棟の柱間は南北16間（29.5×8.8m、約260㎡）、南棟は南北11間（23.6×8.6m、約200㎡）。近年、建築史学の専門家と検討を行った結果、北棟・南棟とも、壁をもつ東西の柱間3間の「正堂」と、壁がなく吹き抜けの柱間1間の「細殿」が一体となる複合建造物と考えている（参考事例：法隆寺食堂（8世紀）など）。

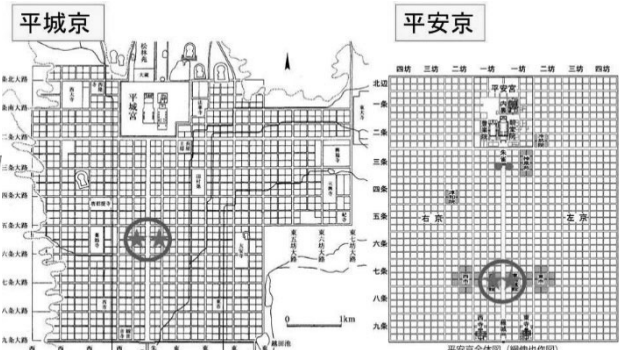
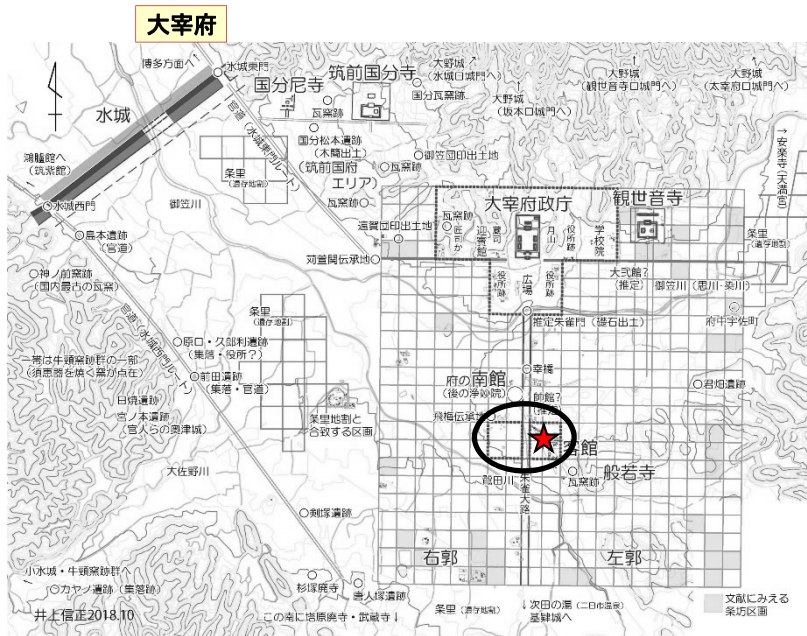
この西側は、政庁のように広い庭がある。庭を挟んだ西側にも建物が存在した可能性もある（未調査）。大型建物群の北東には3×5間掘立柱東西棟2棟と倉庫が配されている。比較的大きな建物のため、客館の管理棟と推測する。

この一帯から、唐の白磁・青磁、新羅の佐波理・新羅土器、日本の奈良三彩、漆器などの国際色豊かな高級食器・容器が出土した。これらの出土が客館と推定するきっかけとなった。とくに客館敷地内の北西（左郭14条1坊）での出土が多く、事例が少ない奈良時代の井戸も集中するため、ここは給食・給仕に係る厨エリアだろう。「仕丁」（里毎に2人ずつ選ばれ、3年間雑役に従事）と記した木簡や出役日数を記した歴名木簡なども、ここで出土している。

客館は、外国使節に宿泊・食事を提供した施設である。博多湾岸の鴻臚館跡が有名だが、畿内にも古くから難波津（大阪湾岸）に客館が置かれ、瀬戸内海を渡ってきた外国使節を安置した。難波館は奈良・平安時代にも引き継がれるが、このころの宮都の朱雀大路沿いにも、客館・鴻臚館が設けられている。平安京鴻臚館は朱雀大路沿いの左右京七条に設けられた。平城京客館（『続日本紀』天平四年（732）10月癸酉条）は詳らかではないが、朱雀大路沿いに置かれた可能性が指摘されている（岸俊男1988）。つまり、海辺の客館と京内の客館がそれぞれ設けられていたのである。

京の中央南北道沿いに置かれた客館は、唐長安城の鴻臚客館（皇城内、朱雀門北西に隣接）や、古くは北魏洛陽城の四夷館（中央南北道の延長両脇と推定）などの例もある。北に坐す皇帝に至る南北道に客館を置くという形式は、礼制機能に基づくとみてよいだろう。つまり、京内客館は中国系都城の一要素といえ、大宰府の客館もこの例に当てはまる。

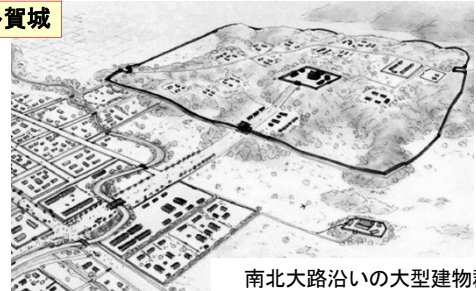
ここで一つ、大宰府と比較されることもある陸奥国府・多賀城によく似た遺跡がある。多賀城城下の中央南北大路沿いの東西に大型南北棟が2列づつ並ぶエリアがあり、その東側東端には11×2間（33×6m）という城下最大の建物が南北2棟並んで見つかった（市川橋遺跡）。出土品に特筆すべきものがなく、倉庫・市・馬関連施設など推測されていたが、この遺跡は、都市内の位置、見つかった建物の大きさや配置のあり方が大宰府例と共通している。このことを踏まえ蝦夷饗応の客館説を提示したところ（井上信正2010）、これを支持する意見も出ている（鈴木琢郎2013、鈴木拓也2015）。



平城京客館の位置 (推定)

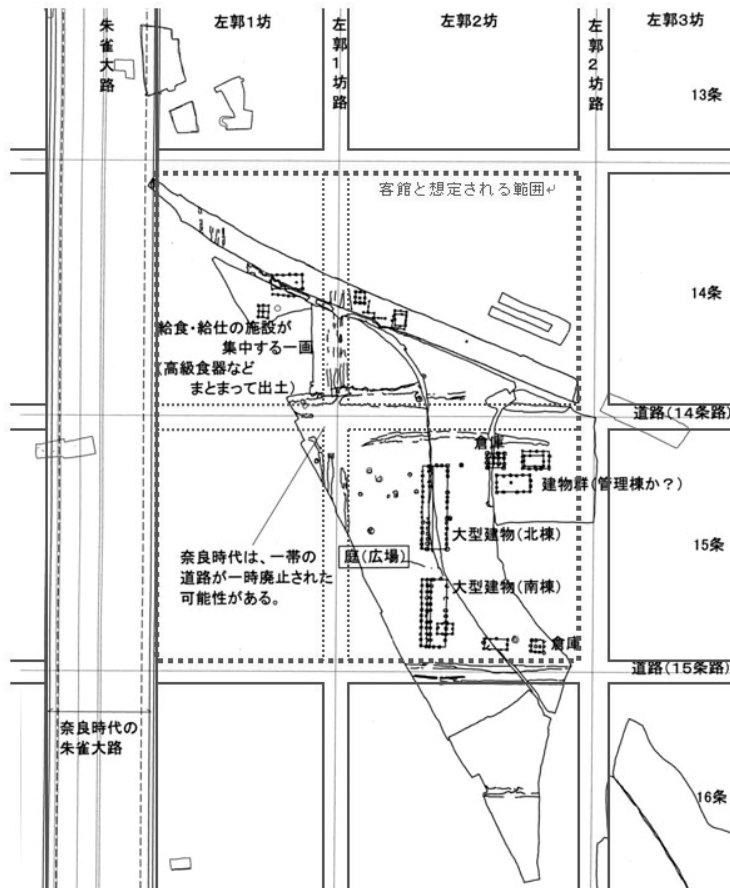
平安京鴻臚館の位置

多賀城



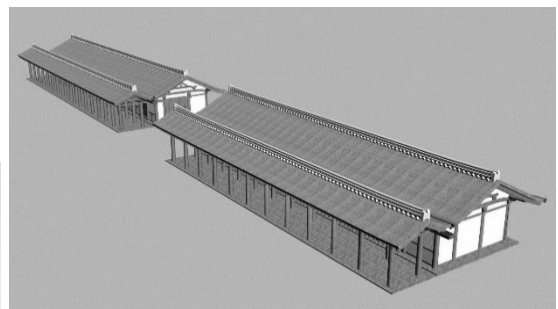
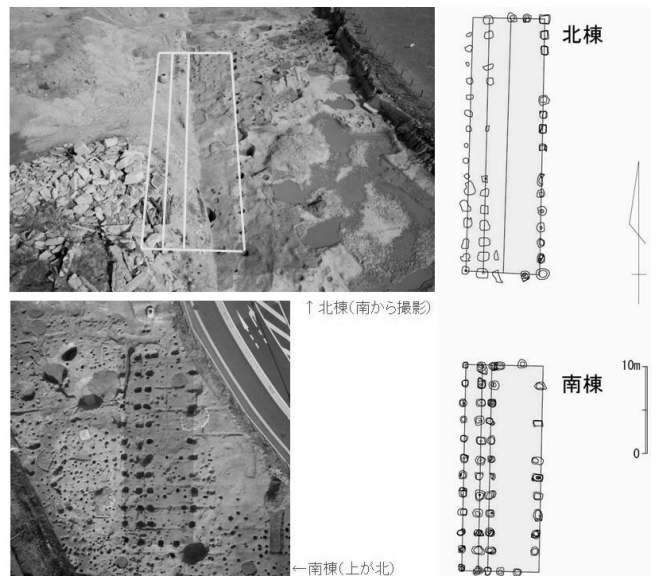
南北大路沿いの大型建物群 (イラスト早川和子)

● 「客館跡」



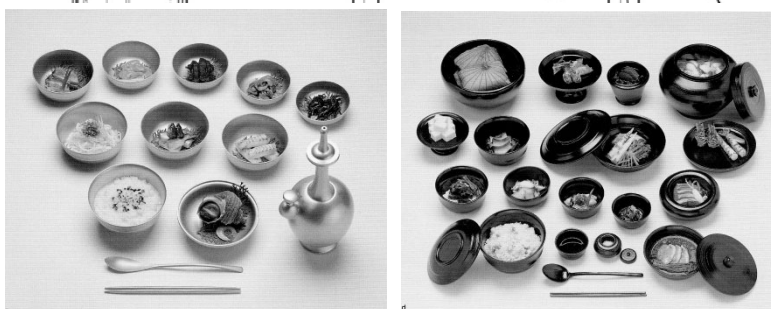
● 条坊内最大級の大型建物

北棟・南棟とも、壁のある「正堂」と壁がない「細殿」からなる複合建築と推定されます。



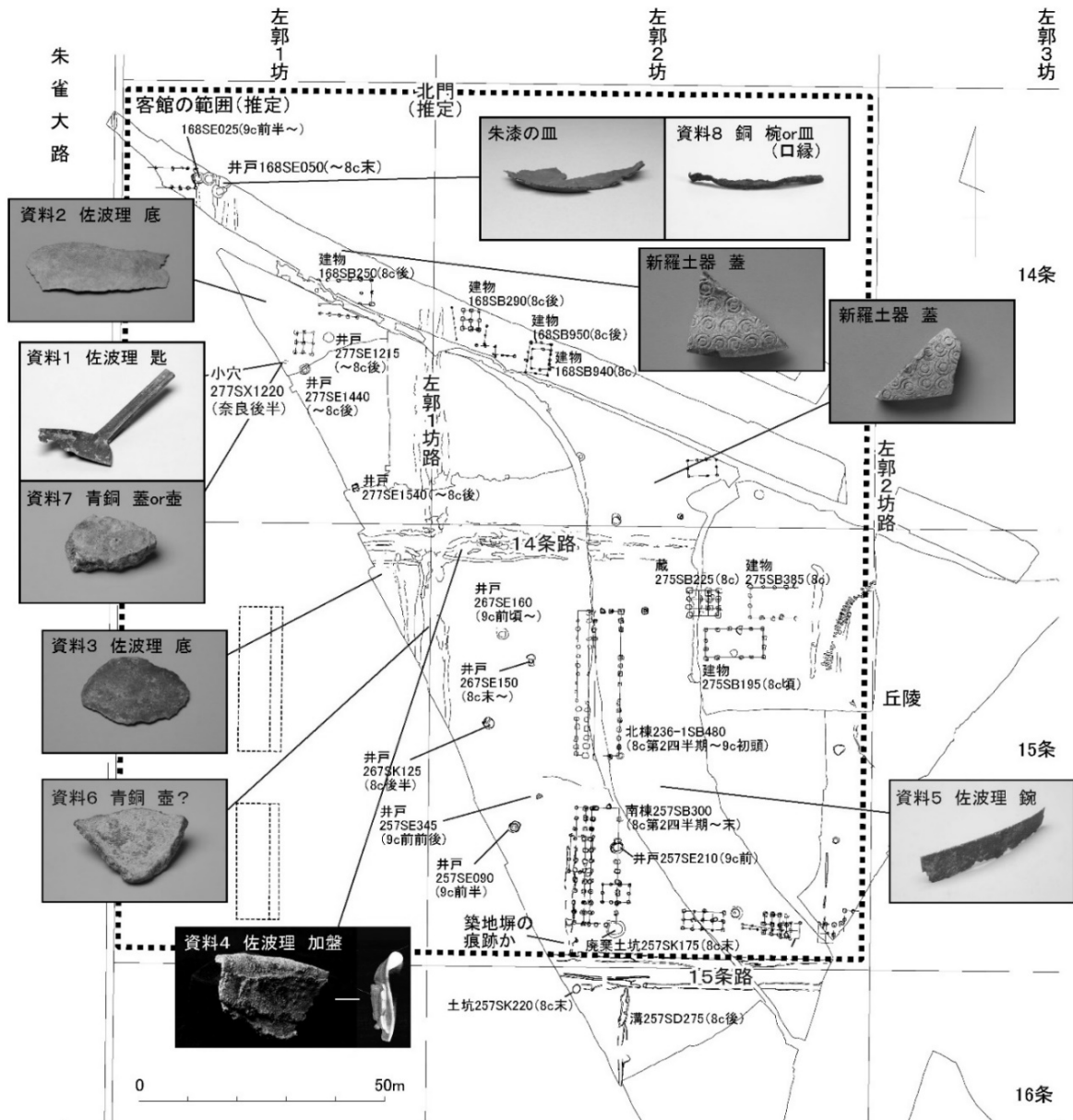
● 高級品や希少品の出土

東アジアからの賓客をもてなすにふさわしい超高級の食器の数々が出土しています。

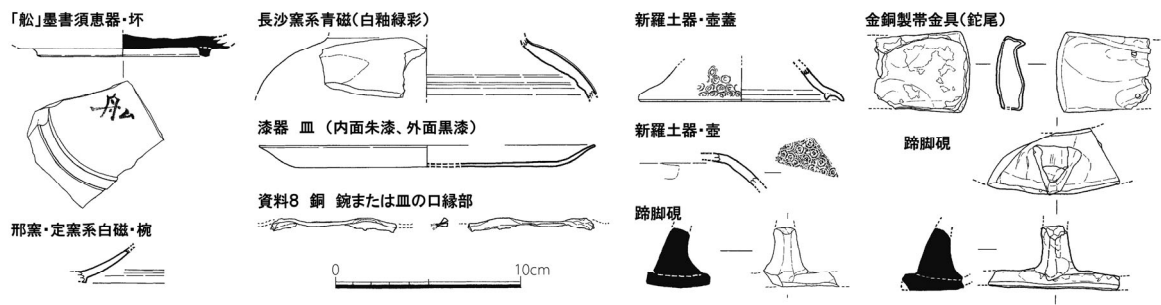


太宰府市教委『客館跡』パンフレットより 食卓の復元 (左: 佐波理、右: 漆器) 写真: 奈良文化財研究所、料理復元: 奥村彪生





■その他 金属製品			■その他 出土品		
銅皿か	鉛板	鉄矛	奈良三彩 壺	須恵器 火舎(獣脚付)	メノウ(交易品か?)
		資料9 銅 火熨斗の柄?	祭祀用の土馬		



井上信正「大宰府出土の響銅」響銅シンポジウム(九州国立博物館1階ミュージアムホール)レジュメより

## 6、客館の機能と構成

客館の構造や使用のあり方を記す日本の史料・資料はなく、博多湾岸の鴻臚館跡でさえこの時期（鴻臚館跡Ⅱ期）の建物はほとんどわかっていない。

ただ、当時の日本が国際標準であった唐の賓礼（賓客をもてなす礼式）を導入し、その舞台として中国系都城を取り入れたのであれば、客館構造もそれに基づくことが想定される。

日本の京内客館設置に際して、手本としたと考えられるのが唐長安城の鴻臚客館である。発掘調査は行われていないが、石見清裕氏は、客館での儀礼復元にあわせてその内部構造の一端を示された（石見清裕 1998。以下、唐の賓礼復元はこれによる）。

それによると、鴻臚客館の正門は北門であり、客館内には階段で上がる建物があったようだ。興味深いことに、館の主人は鴻臚客館に入った外国使節（蕃主・蕃使）であり、皇帝の使でさえ客人であったという。それを示すのが、ここで行われた唯一の賓礼「皇帝が使を送り蕃主（蕃使）と対面する日を伝える儀礼」（『大唐開元礼』）である。

外国使節の出迎えをうけ鴻臚客館の北門から入った皇帝使は、階段を上って建物に入り、西側に立って、東の外国使節と東西で対面した。唐では、東西南北の方位は儀礼と深く関わっており、相手と対峙する方位とそこでの所作（礼のあり方）が問題とされた。外交の場ではこれは国際的な立場・面目につながる大事となるが、その舞台の一つである鴻臚客館では、主従関係で南北に向き合うのではなく、東を主人（外国使節）、西を客人とする主客関係で対面が果たされたのだ。それが客館に必要とされた礼制機能であれば、この東西対面は、客館施設の空間構成にも反映されている可能性があるだろう。

石見氏は、両使が建物に入る際の「東階」「西階」を一つの建物（おそらく東西棟）に設けられた二つの南北方向に向く階段とみて、この中で主客が対面する想定図を示されたが、これを東西に向きあう2棟の建物があるとみて、それぞれの階段を上って対面したという解釈も可能だろう。両使の距離の問題はあるが、ここが礼的空間であればこそ、施設配置もそれに基づいたのではなかろうか。

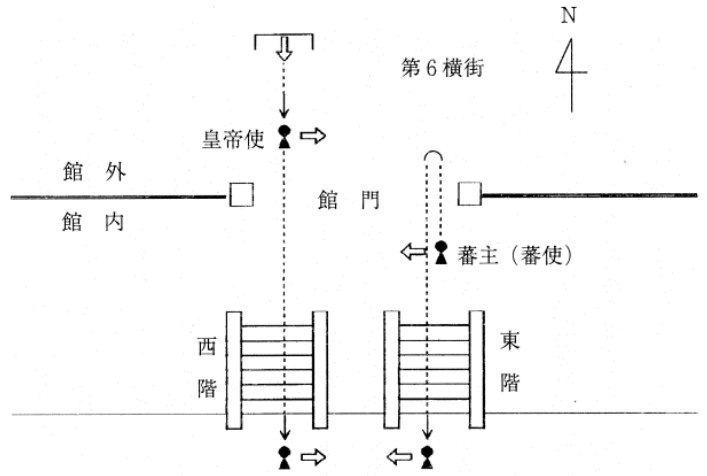
この想定は、見つかった客館跡の建物配置をよく説明できる。

検出された2棟の大型南北棟は、敷地の東側に並んでいる。また西側は朱雀大路まで十分空間があり、そこに多賀城例のように南北棟がもう一対並んでいる可能性はある。たとえ建物がなかったとしても、中央の空間を利用して東西で対面儀礼を行うことは十分可能である。

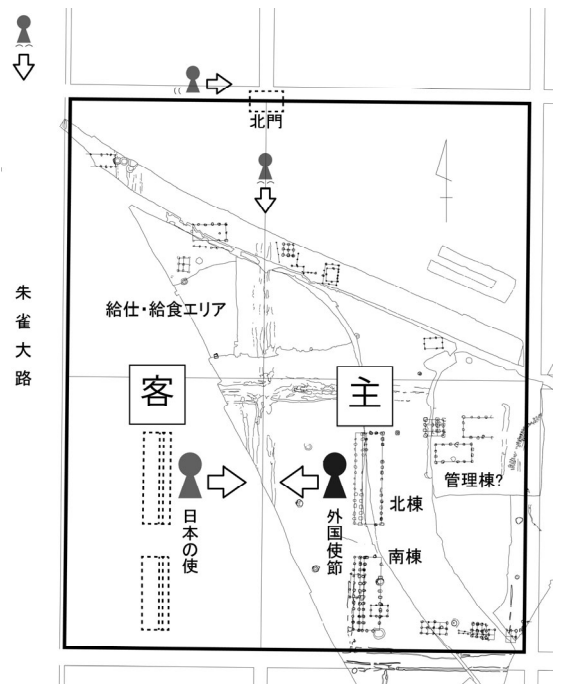
なお、大宰府例・多賀城例いずれもこれら南北棟に見合う大型東西棟をもたない。官衙や邸宅では、一般に主殿・正殿としての東西棟（通常、北に配置）が設けられるが、それが無いということは、ここが上下主従関係を確認する場、つまり正式な外交儀礼の場ではなかったことを示している。

このようにみると、検出された南北棟群は東側にあるため、客館の主人たる外国使節が入る主殿と想定される。建物が荘厳されているのもその故だろう。8世紀末になるとこのうち南棟が先に廃される。廃された理由は不明だが、北棟が残ったということから北の優位性を読み取ることもできよう。唐の鴻臚客館の賓礼でも北を上としていることを踏まえると、使節の長となる人物は北棟に入ったと想定される。

次に門を考えてみよう。本史跡では推定される門の位置に調査が及んでおらず未確認ではあるが、宮都がそうであるよ



唐鴻臚客館「皇帝遣使戒蕃主見日」儀式概念図（石見 1998）



客館跡の建物配置推定

うに門が朱雀大路（西側）に開いていたとは考え難い。東側も丘陵であり、南北棟という建物配置からも、東西には門はないと想定するのが自然だろう。加えて、鴻臚館跡（福岡市）では東門のみが確認されているように、一種の隔離施設でもある客館に門は複数必要ない。少なくとも正門は南北いずれかと想定されるが、唐の鴻臚客館例から北門を正門と仮定すると、敷地の奥側となる南半に中枢建物があり、門に近い北半が給仕施設に利用されている状況は説明しやすい。また、中国では皇帝の所有物は北に置くという考え方があり、大宰府であっても提供するのは天皇が供給するものとみなされるならば、北の給仕施設も一理あるといえる。

北に正門や給仕機能を持たせることなど通常の官衙施設では考えにくい、北闕型都城の礼制機能を考えると、宮殿・政庁から出向くための門は北門でなくてはならない。もし南門を正門とすると、門内、すなわち北に立つ客館の主人（＝外国使）に場の主導権を持たせることになるため、彼の挙動によっては外交問題にもなりかねないのである。となると、それに合わせた客館内の建物配置がとられることに蓋然性を感じる。

このようにこの施設の特徴を、巨大で荘厳な南北棟を備えること、一般的に設けられる主殿的な東西棟を持たないこと、中枢が敷地南にあること、とみたが、それは唐の鴻臚客館構造復元とも親和性が認められた。推測も多いが、国際標準だった京内客館の構造がここに採用されたと想定する。

## 7、外交儀礼と饗讌の場

高級な出土品の数々は、客館でのもてなしを推測させる十分な証拠となっているが、正殿的な東西棟がないことから、ここは正式な外交儀礼・饗宴を行う場ではなかった。その場はやはり**大宰府政庁一帯**であろう。

大宰府政庁は客館跡の約1km北にある。客館を出た外国使節は、幅広い朱雀大路をおそらく隊列を組んで北進し、朱雀門－政庁南門－政庁中門と進み、政庁正殿前の庭で外交儀礼に臨んだと想定される。仮に唐の皇帝謁見儀式が参考にできるなら（石見清裕 1998）、外国使節は正殿に対して南西側におり、東面あるいは北面し、儀式に臨んだと想定されよう。

さて、使節が入京しない場合でも大宰府で饗応し帰国させた記録は複数あり、また「大宰府に召す」とあることから、大宰府が直接やりとりすることもあったとみられる。さらには、外国使節が持参した国書を開封するようになる大宰府だが、基本的には、外交の主たる部分は朝廷（国家）が使者を派遣し執り行ったとみるべきだろう。大宰府官司が担ったのは、外交の一場面となる「饗讌」（饗宴）であった（養老職員令）。

この饗宴は、宮都では宮内で行われている。ただ、儀式と饗宴とは場所を変えており、平城宮では大極殿閣門・朝堂院で、平安宮では朝堂院の西側の豊楽院で行われた。唐長安城でも、大宝の遣唐使・粟田真人が大明宮で受けた饗宴は、宮城西側の麟徳殿で行われたことが知られており（『旧唐書』巻199 東夷伝）、外交儀礼の場ではなかった。こうしたことから、大宰府での饗宴の場も政庁とは異なる場所だったことが推測される。

ここで注目するのは、大型礎石建物が見つかった政庁西側の蔵司丘陵である。この大型礎石建物が蔵ではないことは建築史の研究者からすでに指摘があったが（澤村仁 1998年ほか）、調査を行っている九州歴史資料館は2014年秋、身舎9×2間、南北に各1間の底をもつ官舎建物と公表した（東西9間、南北4間）。政庁正殿（東西7間、南北4間）と比べると、南北（梁行）はほぼ一致し、東西（桁行）は2間上回る壮大な官舎建物ということが明らかとなった。

8世紀前半では、円形造出礎石建物を使った官衙施設は都の宮殿・大宰府政庁しかない。しかも9間の東西棟という、宮殿でも主殿級の建物である。大宰府の、しかもその一官司の主殿とは到底考えられない破格の建物なのである。また見晴らしのきく丘陵上という立地も特別である。筆者は、これが大宰府の饗宴施設と考える（井上信正 2010）。



「蔵司」丘陵の地形および遺構配置図

ここで唐での饗宴儀礼「皇帝宴蕃国使」(『大唐開元礼』)と饗宴施設の事例を参考に検討してみたい。

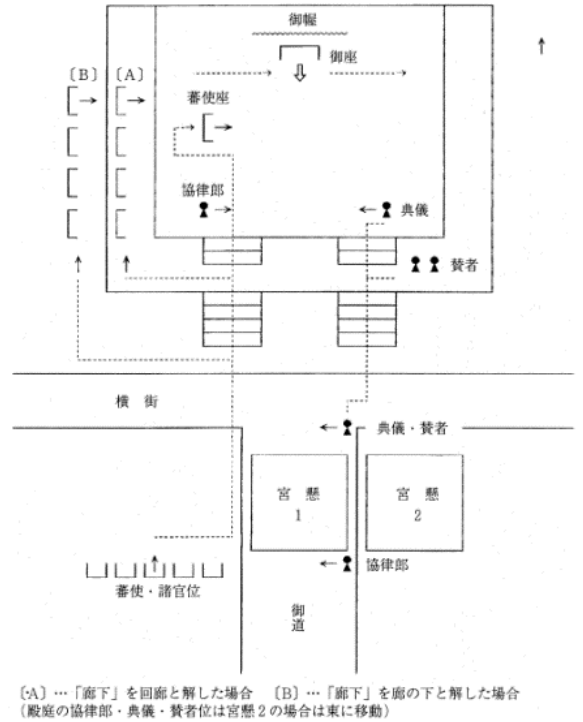
石見氏の研究によれば、皇帝が饗宴の場となる殿舎に出御し、北坐し南面すると、外国使節(蕃国使)は、建物の階段下(南)から昇殿して西に坐し東面した。使節の配下は昇殿せず、その後ろ(西側)で東面した。

これを唐長安城大明宮の饗宴施設に当てはめてみよう。

麟徳殿は大明宮内の西端にある。皇帝が私的に利用する殿舎であり、栗田真人が皇帝・武則天の饗をうけたことが知られるように饗宴施設でもあった(『旧唐書』巻199東夷伝)。ここは発掘調査が行われ、前殿・中殿・後殿の三殿からなる巨大な建築物だったことが知られている。そこで饗宴儀礼の復元を麟徳殿に当てはめてみると、西側に空間を有する前殿を皇帝が出御し外国使節が昇殿した建物とみることができよう。前殿は、東西9間、南北4間の主空間をもつ東西棟であり、大きさなど違いはあるものの、蔵司大型建物と同じ柱間である。また遺構図や復元図をみると、麟徳殿前殿の周囲を巡る空間はさほど広くなく、回廊のほか目立った建造物もみられない。

つまり饗宴の場が主殿たる東西棟と多少の庭で構成されたのであれば、蔵司丘陵の大型建物とその周囲の空間で十分機能する。

蔵司の大型建物前面空間の西南隅では、溝2条が平行しL字に曲がるのが確認されているが、これは空間を画する回廊遺構の可能性もあろう。



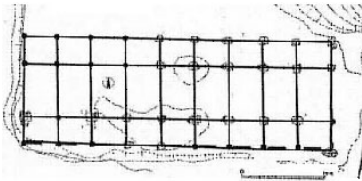
(A) …「廊下」を回廊と解した場合 (B) …「廊下」を廊の下と解した場合 (殿庭の協律郎・典儀・贊者位は宮懸2の場合は東に移動)

唐の賓礼「皇帝宴蕃国使」儀礼概念図(石見1998)

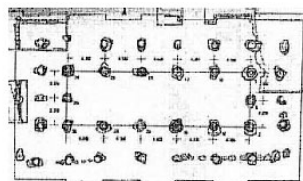
### ● 蔵司の礎石建物の規模・性格

---官舎建物(中央が広い。円形造出礎石。東西棟は正殿的な建物)-----

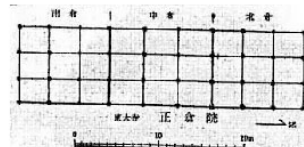
-----倉庫(柱間が等間隔。礎石は自然石)-----



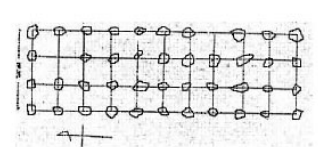
蔵司 礎石建物(東西棟・二面庇)  
(九歴調査資料より)



政庁 正殿(東西棟・四面庇)  
(『大宰府政庁跡』より)

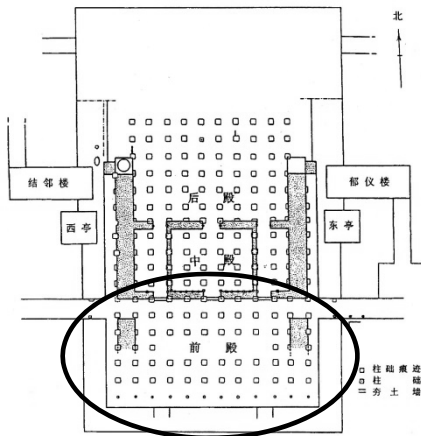


東大寺 正倉院(『大宰府都城の研究』より)

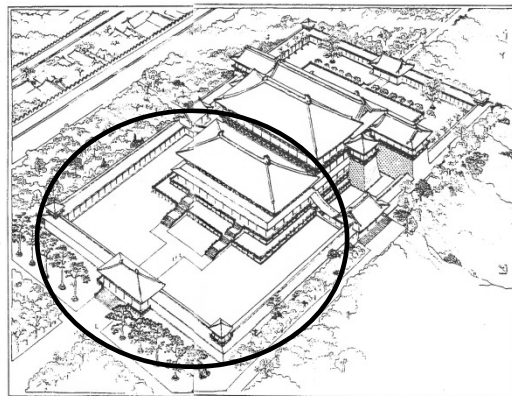


基肄城 大礎石群(『大宰府都城の研究』より)

### ● 唐長安城・大明宮の饗宴施設「麟徳殿」



麟徳殿遺址平面図



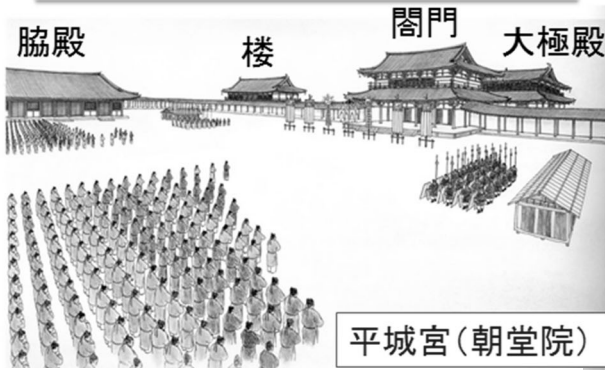
劉致平・傅熹年「麟徳殿復元の初歩研究」『考古』1963-7

『旧唐書』巻199東夷伝  
長安3年(703)、(日本の)大臣、朝臣  
真人(栗田真人)が方物を貢ぎ来た。

真人は(中略)、紫色の袍(ほう)の服を身につけ、帛を腰帯としていた。真人は、書物をよく読み、文の意味を理解した。容姿は温雅であった。

(皇帝である)武則天(則天武后)は、麟徳殿で宴をおこない、真人に司膳卿を授け、本国に放還した。

# 外国の使を迎える



平城宮(朝堂院)

『飛鳥・藤原京展』(独) 奈良文化財研究所 2002 年に筆者加筆

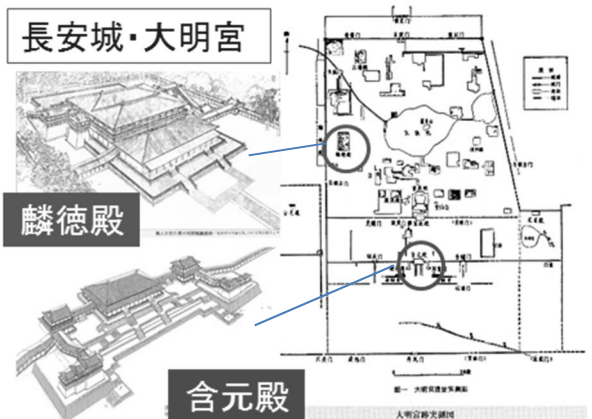


大宰府

九州歴史資料館『大宰府復元』よ



『多賀城・大宰府と古代の都』東北歴史博物館 2010 年より



※ いずれの迎賓館（饗宴施設）も、大極殿・朝堂院の「西側」に位置する

唐の礼制や賓礼「皇帝宴蕃国使」などを参考にすると、「西側」に迎賓施設が置かれることに意味があるとみられる。蔵司丘陵の大型建物は、迎賓館の要素を十分備えている。ここには、貢納品・交易品を収納する蔵も当然必要であり、丘陵全体が「饗宴」機能に関わったのだろう。その担当官司は「蕃客所」だったのではないか。（八木充2018も同様の迎賓機能に加え外交儀礼も行ったと想定するが、大極殿同様に龍尾壇（月壇）を備えた政庁こそ外交儀礼を行う施設だろう）。

そして、新羅使が来日しなくなる9世紀、大宰府の外交舞台装置（官道・朱雀大路・客館等）は縮小された。ただ来訪する新羅・唐の商人との交易を朝廷は重視し、博多湾岸の鴻臚館（筑紫館）に安置するなど、商人らを外国使節並みの待遇で迎えている。このように大宰府の交易機能は残ったものの、外交に関わる施設が不要となった流れの中で迎賓施設は不要となり、東側の蔵の機能のみ残ったのではないか。その流れの中で「蔵司」が担当することになったのだろう。

なお大型建物の動向は不明だが、再び迎賓館として使用される可能性を残し、しばらく管理されたのだろう。礎石が残るのもそうした意味があったかもしれない。なお周辺から見つかる武器・武具から武器庫として使用された可能性も考えられるところだが、見つかる鉄鍬は熔融するほどの熱を受けており、建物火災でここまで高温となるか疑問がある。

最後に、9間の造出し礎石建物は宮殿の主殿級の建物と述べたが、言い方を変えると、ここだけ平城宮だったとの印象さえ受ける。饗宴は大宰府の職掌と職員令にはあるが、朝廷の専権事項であることをこの建物が物語っているように思う。それは、都城すなわち陪都の機能を備え、留守官相当の大宰府の長官だからこそ、担当できたと考える。

井上信正編著 『大宰府条坊跡44』太宰府市教育委員会 2014年

井上信正 「大宰府」『古代の都市と条里』吉川弘文館 2015年

井上信正 「西の都」大宰府と外交施設『新羅王子がみた大宰府展図録』九州国立博物館 2015年

井上信正 「大野城の道」『都府楼』47号 公益財団法人古都大宰府保存協会 2015年

井上信正 「大宰府の葬地と都市」『国際シンポジウム東アジアの古代都城と葬地・墓葬』東亜比較都城史研究会 2018年

井上信正 「大宰府条坊論」『大宰府の研究』高志書院 2018年